

食の文化祭

地域を創る、足元からの食育活動

森の新聞社・食と農の応援団員(来年度予定) 森 千鶴子



筑前玄海魚まつり。鐘崎の家庭料理のパネル展示。その場で聞いたこともどんどん書き込んでいく



中津江バス停朝市、一周年記念の様子。狭いバスの待合所に語らいが広がる

福岡県宗像市 宮崎県高千穂町 広がる地元学、食の文化祭

食の地元学である「食の文化祭」を東北に学び、九州各地の地域づくりに関わる中で、全国で地元学を実践する水俣市の吉本哲郎さんとの出会いがあった。食の背景には暮らしがあり、暮らしの舞台となる集落がある。地元学は、その土地で暮らす人が、その土地に生きていくために、自分たちの足元を自分たちで調べる活動だ。外の人を聞き役に集落を歩き、そこにあるもの、水のゆくえ、住み方、庭先の有用な植物、祭り、行事、食べ物などを丹念に見ていく。開場には立ち会った。宗像市では、「筑前玄海祭りを見つめ直し、絵地図を作ってきた。夜神楽をは

食育の勉強会、講演会、シンポジウムに講師団を紹介 食と農の応援団



「食と農の応援団」ホームページ
<http://www.ruralnet.or.jp/ouen/>

「食と農の応援団」。消費者と生産者との間の情報交換や体験交流などを促進し、相互理解をすすめていくことを目的に、平成九年に設立されたボランティア団体だ。有識者や実践者からなる「応援団員」を、講師照会やイベントなどの講師として紹介している。団員数は現在、一九一名、四〇都府県にまたがっている。昨年九月にはホームページができ、各団員のプロフィールやメッセージ、活動情報を見ることができるようになった。アクセス数は月五万ページを突破し、講師照会の問い合わせも、連日応援団事務局に寄せられている。Eメールで寄せられるこの問い合わせには、

「食と農の応援団」は、講演会やイベントを企画した背景や担当者の想いが記入されていることが少なくない。「食育を推進し、学校から地域へ情報発信し、子どもの持つ本来の元気を引き出したい」(県教育委員会職員)、「農」のあるまちづくりのために(町役場職員)、「米づくりの学習を通して、地域の川の水を浄化できないか。さらには役所や農家に呼びかけるなど、小学生なりに地域で運動を広められないか」(小学校教員)、「保護者の方々に食の大切さをわかっていただくたい」(小学校PTA役員)、「子どもの食卓研究で小中学生とその保護者約四五〇〇名を対象にアンケート調査を実施した。その報告会と合わせて基調講演をお願いしたい」(社団法人職員)、「食」と「農」に裏付けられた環境衛生とまちづくりを両立させる自然循環型共生都市づくりをめざして」(NPO法人関係者)、「病院職員だが、安全な食をのびるため、食育を勉強したい」(個人)。

問い合わせを通して、子どもたちの未来や地域の未来を真剣に考えている方たちが、各方面に幅広く存在していることが伺える。

に、漁師と観光業者が、業種を越えて、地域での産業興しに取り組みもうとしている。祭りでは、漁協婦人部や都市部の女性グループ、JAむなかた、市役所有志など様々な団体の人々が出店する「鐘崎ふれあい食堂」で、魚を使った家庭料理を提供した。また、鐘崎の漁と暮らし、家庭料理を紹介するパネルを展示し、魚を食べる人と漁師の語りも生まれた。この秋には、この祭りに参加したJAむなかたの女性部が中心となつて、「むなかた食の文化祭」を開催する。「今度はうちのおまつりに来てね」と漁協にも声をかけている。宮崎県高千穂町では一年を通じて、集落の行事や食祭りをみつめ直し、絵地図を作ってきた。夜神楽をは



高千穂町の食の地元学。「食のわらしべ長者」と題し、食材を交換しながら家々をまわる

農文協 多彩な眺めを味わう食の万華鏡

51号 岐路に立つ日本のお茶
責任編集・熊倉功夫 日本のお茶・茶業の現状、世界の日本の茶、国内消費の実態、今後の展望ほか

52号 学校のお昼ごはん
責任編集・江原純子 日本の学校給食の現状、学校給食の文化的取り組み、海外編(ネパール、タイ、韓国、アメリカ、フランス他)ほか

53号 食の色彩学
責任編集・茂木美智子 和菓子の色と日本人の美意識、「食卓の色」にみる現代の食、デパ地下総菜の色彩戦略ほか

54号 文化としてのレストラン
責任編集・武井秀夫 フランス人にとってのレストラン文化、日本における外食文化、アメリカのファストフード文化ほか

55号 2004夏 責任編集・樋口満
古代ギリシャ・オリンピック選手食の食、総括 オリンピックと食、歴代・競泳選手にみる食のエピソード、アスリートたちの食事、スポーツ選手に対する栄養教育・食事指導、選手村の食事とサポートほか

56号 2004秋 責任編集・青木直己
おやつのお茶づけからスナックまで
これこれ戦後おやつ発展史/母手作りのふるさと味のボン菓子、黒糖、阿わやおこし/海外のおやつ文化(中国、イラン、ロシア)/現代の子のおやつ、ほか

vesta

定期購読受付中

定価750円 季刊、B5判
年間購読料3000円



古今東西、食生活の背後に広がる自然と人間、人間と人間の関係、民族学、民俗学、社会学、歴史学、栄養学など多様な角度から迫る食文化誌。発行・味の素の文化センター

ご注文は

農文協 〒107-8668

東京都港区赤坂7-6-1

☎03(3585)1141

FAX.03(3589)1387

URL=<http://www.ruralnet.or.jp/>

価格は税込

宮城県宮崎町（加美町）に学んだ

「食の文化祭」の精神

東京で六年間コピーライターとして働き、八年前に郷里の福岡県宗像市にUターンした。約十年の都市生活を経て、農家の長女として生まれた自分では失ったものを考えた結果、私は「農村や農家の姿を書きたい」と思った。増刊現代農業の取材記事は、私が「農村記」の経済があり、受け継ぎ守るべきものがあることを志してからの仕事である。取材で九州の、主に中山間の村々を訪れて驚いた。過疎高齢化などなんの料理でもてなしてくれた。村の暮らしがもつと知りたくなり、私は仕事で縁のあった大分県中津江村に居を構えた。ここを拠点に、中津江村をはじめ、大分県竹田市などで印刷物の制作や、交流イベントなどのお手伝いをするようになった。



宮城県宮崎町の食の文化祭、昨年の会場の様子

駆け出しの農村記者の私にとって、増刊現代農業は、記事を書く場としてだけでなく、各地の取り組みや農業を学ぶ場でもあった。九九年にはじまった宮城県宮崎町（現加美町）の「食の文化祭」も、同誌に掲載されている結城登美雄さんの記事で知った。ふだん着の食事をもち寄って、ズラリと並べ、足元の食事を見つめ直してみる。食を通じて人々が出会い、語らいがはじまり、家々の知恵が行き交う。宮崎町商工会と結城

大分県中津江村

バス停朝市から、おばちゃん

と青年団の文化祭へ

中津江村にも元気なお母さんたちがいた。村内唯一の信号機横、栃原バスセンターの待合所で、朝市を行っている生活研究グループの女性たちだ。週に一度の「バス停朝市」には、旬の庭先野菜と漬物、パンや自家製の乾物などが集まる。

店の常連さんは、バスを使つて病院に通うお年寄り。週に一度の語らひを楽しみにやってくる。ここにも小さな食の文化祭があった。「お客さんにお茶を出してみませんか？」と提案したところ、試食用の漬物やお茶を飲み、「キャベツを、津江茶と一緒にバイキ

ら叫ぶおばちゃんに、バスの中まで走ってキャベツを届ける風景にみんな大笑いした。そして二〇〇三年十月、この生活研究グループと村の青年団が一緒になって、万円台に届くようになつた。運転手さんも降りてきてもち寄りのおやつと漬物を、津江茶と一緒にバイキ

二〇〇二年十二月、市内の空き店舗を会場に、「竹田の家庭料理大集合」が開催された。中心となったのは、食生活推進協議会というゆるゆるのメンバーで、町づくりグループ、加工所のみやま、市内の飲食店や、保育園、給食調理場など、食に関わるさまざまな人々が集い、家庭料理、加工品、お菓子など二〇〇皿が並んだ。展示のあとは試食会。おいしい料理を囲んで、賑わった。竹田の城下町では「こうじ仲間」の集い「が発足。麵を使った料理の持ち寄りを行った。そして二度



小学校を会場に、学区単位で自主的に取り組んだ。お母さんたちの笑顔がいっぱい



中津江道の駅弁大会のお弁当パネル。青年団の手作り

を一つなく環ができ、春には、村から依頼を受けて、道の駅リニューアル記念「中津江道の駅弁大会」を催した。「家にあるもの、山や川にあるもの、棚田の米でお弁当をつくらせて、売ってみたい」と呼びかけ、一組が参加。団員とおばちゃんたちとお弁当の試作を、中津江道の駅弁大会のお弁当パネル。青年団の手作り

竹田の家庭料理大集合

大分県竹田市

雄さんと宮崎町商工会に連絡をとってもらって、現地を見に行った。「九州から来たもの好きがいる」と歓迎してもらい、「自分たちの取り組が九州で役に立っているなら、何でも教える」と、運営のイロハを教える。しは打ち上げ花火ではないから、地道に続けていくことが大切なんだよ」商工会事務局長の橋本さんの言葉に、深くうなずいた。



ズラリとならんだ竹田の家庭料理は150皿

農文協

自然から人間へ、
農村から都市への呼びかけ

増刊 現代農業

定期購読受付中

定価900円 季刊、A5判
年間購読料3600円

定年婦農、産直・直売、食農教育、地元学、グリーンツーリズム：農の暮らしによるライフスタイル革命の動きを全国から報告。



バックナンバーより

●各900円

おとなのための
食育入門

【65号・2004年8月】 ●900円



大人は子どもに伝えるべき何かをもっているのか？食の商品化で断ち切られた人と自然、町と村の環をつなぎ直す食育の動き。結城登美雄、島村葉津他

58号 スローフードな日本！

60号 食の地方分権

37号 食べものの教育応援団

53号 孫よ！土と遊べ ふるさとに学べ

月刊 現代農業

定期購読受付中 定価800円 月刊、A5判
年間購読料9600円

安全安心の作物づくり、農家の加工・直売・産直、食農教育、グリーンツーリズム、農都交流など、農業・農村、食の今を伝える総合誌。

【2004年11月号】特集
現代農業
落ち葉いまどきの活用術
堆肥づくりは簡単！省苗く
け、落ち葉をばい！育
方、法がいくつに、軽
播種・定植、無
タラク

ご注文は

農文協 〒107-8668

東京都港区赤坂7-6-1

☎03(3585)1141

FAX. 03(3589)1387

URL=http://www.ruralnet.or.jp/

価格は税込